寄稿　創立50周年に寄せて

スピリットのある男（防大時代の尾辻秀久）

4期主将　冨澤　暉

昭和34年春、防衛大学校の武道場で新入生に対するクラブ活動説明会（各部勧誘会）があった。陸上部主将になったばかりの私は熱弁をふるったつもりであったが、終わったあと私の前に現れた一年生はたった一人であった。それが防衛大学校第７期生の尾辻秀久である。色あさ黒く短躯、みるからに負けん気の強そうな目付きで「鹿児島・玉龍高校で走っていました。入部させて下さい」と言ったように思う。

尾辻は頼りになる男であった。素人出身のアスリートが多く関東大学第２部で下位を低迷していたわが部の中では、彼は何といっても強力選手であった。専門は当時中距離といっていた400・800だったが、1500でも5000でも、またいざとなれば400リレーの100でも担当しうるオールラウンドランナーで、神奈川六大学対抗などではピカイチのポイントゲッターであった。性格は明るく、何をやっても敏捷で器用な事この上なし、運動部の選手が自分の専門外で出場できる校内競技会ではサッカー選手として参加し、ミラクルシュートを放って「やんや」の喝采を博したこともある。度胸がよくてチャンスに活躍、「華」のある尾辻でもあった。

ある競技会に参加した時、尾辻のスパイクが壊れて使えなくなったことがある。彼の足は小さく仲間の物では合わないので、仕方なくキャプテンの私が同じグラウンドにいた女子高チームのところへ行き、女の子のスパイクを借りてやった。彼はその借り物で大活躍し競技後には自ら颯爽とスパイクを返しにいったが、それをきっかけに、そのスパイクの持ち主と仲良くなり、仲間達を大いに羨ましがらせたものである。ヤンチャで皆に愛され、女にももてる男だったのである。

防大陸上部が箱根駅伝に出場したのは昭和36年と38年のたった２回限りのことだが、その36年の大会で第１区すなわち読売新聞社前からのスタートを走ったのも尾辻であった。このレースばかりは実力のほど如何ともなしがたく敗れたが、今となってみれば、彼は防大生で最初に箱根駅伝を走るという幸運の星をも持っていたのである。

その尾辻が防大をやめると言った時、私は反対した。防大のキャンパス内で彼の母堂に一度だけだがお会いしたことがあった。とても若々しく優しさにあふれたひとであった。そして彼の父君が海軍の艦長でとうに戦死されていたこともよく知っていたのである。

尾辻が防大からいなくなって暫く、彼の消息を聞くことはなかったが、防大陸上部のOB会では彼のことがいつも懐かしく語られた。我々にとって彼は忘れ得ぬ人物であった。

そのうちに彼が東大に入ったという噂を聞いた。防大ではそれほどの秀才とは聞いていなかったので、「ほう」と感嘆詞を発したが、「彼の気の強さと集中力をもってすればそれくらいのことはやるだろう」と思ったものである。そして年を経てある日、彼が県会議員になったという話を聞いた。また「ほう」と声を出したが、今度は「成る程」と思った。「彼には政治家が向いている」そう思った。彼はとても魅力的で、何か強烈なスピリットを感じさせる男なのだ。

陸上競技部の先輩としては、引き続き「おい尾辻」と呼びすてにするつもりだが、そのうちどこかで「尾辻先生」と呼ぶことになるのだろうか、是非そう呼んでみたいものである。

昨秋、尾辻君（７期）が厚生大臣になった。陸上競技部と大臣誕生とは関係のないことだが、我らが仲間から大臣が出たことを、素直に、共に喜びたい。

この文章は今から20年ほど前、尾辻君が鹿児島県会議員から初の国政選挙（衆院）に出馬しようとした時に、彼の秘書から頼まれて書いたものである。無論これは、集票には役立たなかったのであろう、その時、彼は見事落選した。その後、彼は遺族会を背景に参院選に３回当選、この度ついに大臣の座を得たのである。

箱根駅伝初出場

5期　青山利雄

防大が本格的に箱根駅伝出場を目標にし始めたのは、昭和34年頃からである（4期生冨澤主将を中心に部員23名が、朝倉充先生（14・15各回早大連勝の原動力となられた方）と着任早々の日体大出身井坂恵裕教官の指導のもと練習に励んだ。

防大には高校時代に陸上競技部で本格的に走った学生はごく少数であり、起床から夜の自習時間まで日課時限がびっしり定められており、練習時間が限定されていた。

35年は、夏季訓練（7月）中は全国各地で各個に練習し、夏休み（8月）が始まると同時に防大に戻り、真夏のカンカン照りの中で強化合宿に入り、完成早々のトラックで、毎日10km以上走り込んだ。12月4日、10マイル予選会、冷たい冬雨の中、5位ではあるが、箱根駅伝の出場権を獲得した。

自己に打ち勝ち、苦しみを我慢し、予選会目指して単調な練習に、箱根、箱根と言い聞かせながら耐えてきたが、遂に私達の夢が実現した。



箱根駅伝最終エントリー

茅ケ崎海岸を走る　距離も短縮

チーム結成二年目

初出場　練習不足は気力で

箱根駅伝　15校の実力打診

防大

全校をあげて応援

苦しかったことも忘れて、早速、試走練習に励み、12月24日から小田原中継所横の小伊勢屋旅館で合宿に入った。同宿の日大森本監督から有意義なお話しを伺い、かつ日大各選手と随分交流した。また、城山競技場で練習をやった時、日大、中央大、早大等の各選手と一緒になり、良い刺激となった。

あんなに観衆の多い大会で走るのは、全部員が初めてであり、実力を出し得なかったのも事実であった。声援の中には、「しっかり走らないと税金を払わないぞ」とか、アルコールの入った人が「日本の防衛をたのむぞ」とユーモラスなものもあった。

とにかく、1、2のブレーキらしきものはあったが、全員最後まで走り切った。結果は15位であったが、青春の良き思い出であった。

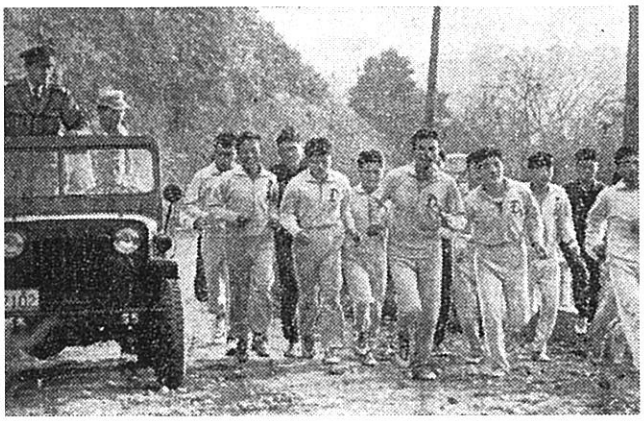
当時のメンバーは、今や自衛隊のみならず、各界で活躍しているが、その精神的肉体的ベースはこの箱根駅伝が育んでくれたように思う。

名選手を生み出した箱根駅伝が、今後ますます盛んになることを祈念し、また我が母校の後輩が早い機会に、この大会に出場してくれる事を期待している。

第37回東京箱根間往復大学駅伝競走

防衛大学校記録　13時40分07秒　(223.4km)

往路 東京→箱根 6時47分01秒	1区 22.7km 東京→鶴見 尾辻秀久 ② 1時17分22秒	2区 23.7km 鶴見→戸塚 中村　均 ③ 1時22分57秒	3区 19.9km 戸塚→平塚 甲原哲一 ① 1時10分48秒	4区 20.7km 平塚→小田原 谷野正芳 ① 1時14分44秒	5区 24.7km 小田原→箱根 青山利雄 ④ 1時41分10秒
復路 東京←箱根 6時53分06秒	10区 22.7km 東京←鶴見 立石良文 ④ 1時21分59秒	9区 23.7km 鶴見←戸塚 東　宏一 ④ 1時32分30秒	8区 19.9km 戸塚←平塚 高橋正志 ③ 1時15分31秒	7区 20.7km 平塚←小田原 中川浩佑 ② 1時19分52秒	6区 24.7km 小田原←箱根 中山篤信 ① 1時23分14秒



OB会創設の想い出

5期　星野　毅

昭和37年頃、私が久里浜の通信学校学生の当時、冨澤先輩（4期）と同期の青山主将に促され防大指導官をしておられた田熊先輩（2期）を訪ね、OB会設立をお願いした。

田熊さんの人柄は、明朗快活、度量が大きく真冬の太陽の如くその存在だけで人の心を暖かくした。自己には大変厳格であったがそれを表面に出すことは滅多になかった。

当時OB会を有している部は殆んどなく、何故必要なのか、その運営は如何にあるべきか等基本的なことから考えることとなった。これに乗じて私は自分の現役時代から抱いていた危機感を強く訴えた。事実、当時は学内外に「箱根駅伝出場」で名が知られた陸上競技部を私的に利用しようとする勢力が存在した。これを断固排除して学生の自主性維持を強力に支援し得るOB会が必要であると申上げた。

これに対し先輩は君の気持ちは分かるが賛同はしない。

目前の現象に拘泥するのでなく素直な自然体でOB会の意義を考え、懸念されるそれらの人々に対しても納得して頂けるよう正面から堂々と主張できるものを考えようと云われ、やがて先輩が示されたのは次の2項目を創設の基本とすることであった。

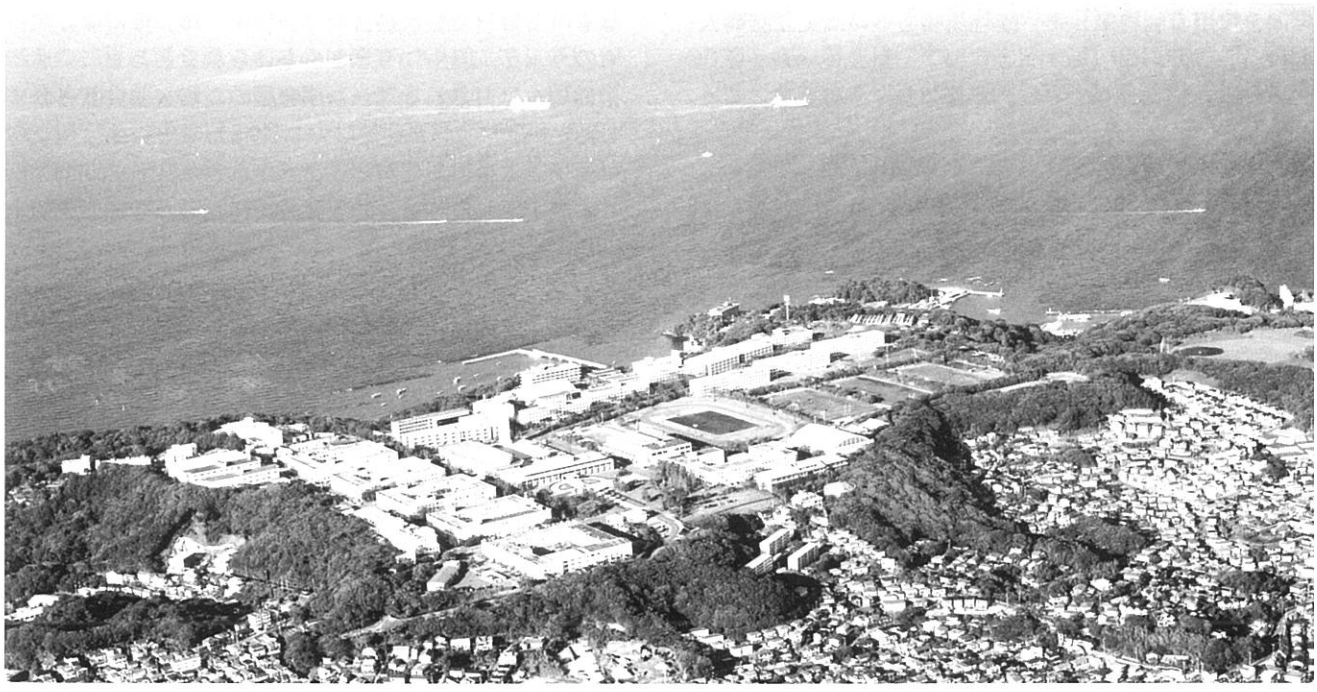
一、OB会の目的は、OB相互の切磋琢磨・親睦、現役学生の精神的支援とする。

一、OB会の運営はOB自らが行い、現役学生に迷惑をかけない。

まさに明快、異存なく従った。その後先輩は自ら全文を起草され新島先輩を初代会長とするOB会が発足する運びとなる。

やがて田熊先輩は富士学校機甲部の教官になられたが、演習場での初級幹部に対する訓練中、事故を起こしそうな学生の姿勢を正そうとした瞬間、自らが犠牲となって殉職された。後日ご自宅にお伺いした際、御父上が靖国神社で息子と会えるような気がしますと仰せられた。間違いなく先輩の御霊は私共全員を見守っておられると思う。

先輩の示された2項目の中で私が今も深刻に感じているのが「現役学生への精神的支援」である。もとより我々自衛官が後輩に威張れるような物的支援をすることは難しい。だからといって精神的に何ができるのか。可能な限り後輩の練習や試合に出向くことが大切な要素だということは分かっている。しかし、「精神」には無形の要素が重要なのではないか。神仏ではない身で支援を言い得るような精神を贈ることができるのだろうか。この愚問を繰り返しながら思い付いたのは一日一日を大切にして、小原台で練習を重ねたように、自分の器に合った心身の努力を続け、事あらば田熊先輩のように瞬間的に反応できるような心構えを絶やさぬこと、その後ろ姿を見て後輩が何か感じてくれることを願うことかも知れないと考えるに至った次第である。



「創部25周年記念号」作成回顧

8期　猪瀬　優

昭和50年に至っても、創部当初の状況や変遷を整理・記録されたものは、ほとんど皆無でした。

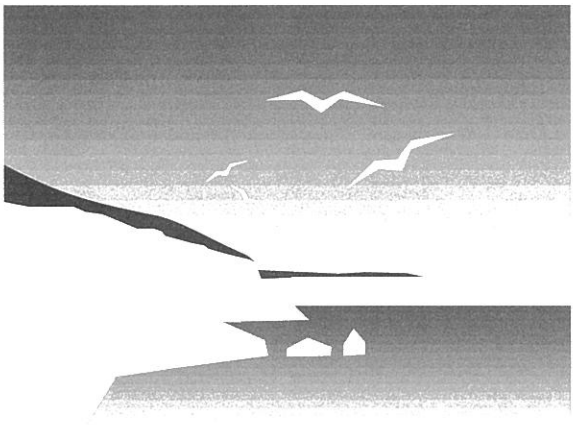
また、防大指導教官として当部後輩の指導に尽力された２期の田熊さんが、富士学校戦車教官として教育中に殉職され、更に、学生時代に競歩部門を発足させて活躍された12期の土屋さんが、第７通信大隊勤務中に病気で亡くなられましたが、当部として、お二方の偉業をまとめたものもありませんでした。

部誌編纂につきましては、13期以降数回検討されましたが、20期に至り現役主体で「走・跳・投」を発刊、その折、当時のOB会会長新島先輩や井坂先生から、創部25周年を記念して、今度こそ、部誌（史）を作成するよう強い要望がありました。

昭和52年、当部OBの防大勤務者・研究科学生で部誌編集委員を編成し、先ず目次を作成して会長の承認をいただき、未掌握だった記録・資料の収集・整理、及び田熊・土屋両先輩の偉業等の収録、並びに現役とOBとの結びつきを狙いとして、部誌作成に着手、主として、河相君（10期）と奥村君（14期）が概史、小森君（17期）が記録、木津・矢野君（18期）と平野君（19期）が編集・庶務、岩田君（18期）が表紙のデザインを夫々担当、そして私が統括させていただきました。

各期主将等による寄稿等の協力を得、部誌発刊時には卒業していた真淵君以下22期生そして有馬・野山君（23期）等当時の学生と一体となって、昭和53年５月、創部25周年記念号を発刊させていただきました。

概史資料や写真の収集に苦労しましたが、最も困ったのは、費用の制約でした。臨時徴収あるいは記念誌購入依頼も検討しましたが、60％にも満たない当時の会費納入状況等から、急場には間に合わないと判断して経費節減を図り、特に、印刷代については、河相君が手腕を発揮し、最終的には、お金はこれしかありませんが何卒お願いしますと印刷屋さんに平身低頭し、印刷が可能となりました。



ところで、本誌が、信頼し得る概史、かつ、かなりの枚数の写真を掲載することができましたのは、何と言っても、各期、特に４期以降の状況を把握されておられた井坂先生の助言や写真提供の賜であったことは、申すまでもありません。

井坂先生は、昭和31年に防大に着任されたと承っており、私が入校した時には、大ベテランの教官となられており、練習・試合には、必ずと言って良いほど顔を出されました。

特に、箱根駅伝出場権獲得には、著しい熱意をもたれ、そのため練習時の指導は厳しく、防大～野比海岸往復等のトレーニングのときには、オートバイに乗って後ろから声をかけての指導、身体がきつくともがんばって走らざるを得ず、休日無しのこうした練習により箱根駅伝出場が叶えられましたのも、先生のご指導・ご示唆のおかげです。また、競歩部門を導入、関東インカレ20km競歩で優勝した土屋君（12期）・宮島君（20期）を輩出、このことにより、「創部25周年記念号」の表題に「歩」が加わり、そしてその後、「走・跳・投・歩」が、当陸上競技部の合言葉となっております。

このことも、先生の鋭い着眼と適切なアドバイスによるものと言っても、過言ではありません。更には、幾組ものカップル誕生にも意をもちいられるとともに、進路指導にも尽力される等、当部発展のため大変貢献されました。

先生、本当にありがとうございました。

本紙上をお借りし、井坂元教授に、心から感謝申し上げる次第です。

創部後、四分の一世紀次いで半世紀が過ぎ、そして次の半世紀は……。

防大陸上競技部が、縦糸と横糸の織り成す色模様のように、絆を更に密にし、新たな目標に向かって力強く前進されますよう、そしてOB会が、総会等にも期を厭わずもっと多くの方々のご参集を得る等、従来以上に充実して相互の親睦を図るのみならず、現役の益々の支えとなって効果的な支援をなし得るよう念願しております。

さすがは防大

8期　藤縄祐爾

8期生は在校間2回の箱根駅伝出場を経験したが、毎年各校の様子を見ている宿屋の主人に「さすがは防大だ」と感心されたことがある。その理由は、長距離以外の部員も一丸となって支援しており団結が固いということだった。しかし何のことはない、他校と違って部員が少なく、我々短距離や跳躍組も一緒に泊まって支援しなければ人手が足りないのが実情ではあった。

もっとも、この主人が言うように部の団結は重要である。陸上競技は基本的には個人競技の色彩が強いが、それだけではなくリレーや駅伝のような団体種目もあるし、総合得点を競う面もある。したがって、部員には個人の記録を伸ばすための厳しい自己練磨の継続と同時に切磋琢磨や相互協力が必要となる。それは全と個を考える機会でもある。

思えば、このことは幹部自衛官の勤務にも通じるところがある。リーダーには、自己の人格能力を磨く不断の精進、他人や部下の人間性の理解洞察及び組織と個人についての確固とした考え方の確立が強く求められる。陸上競技部の部員は、そのことを学生時代から実践していると言っても過言ではない。たとえ競技者として一流の記録にまで到達できなくても、その過程での真摯な努力は、必ずその後の勤務や人生の糧となるに違いない。

新たな50年を歩むわが陸上競技部が、部員一人一人にとって充実した4年間を送るとともに気心の知れた生涯の友を得る場となり、多くの有為な人材を輩出し続けることを心から祈念する。

50周年に寄せて

8期　中山篤信

50年史編纂の話を本当に喜んでいるのは一桁の期ではないだろうか。

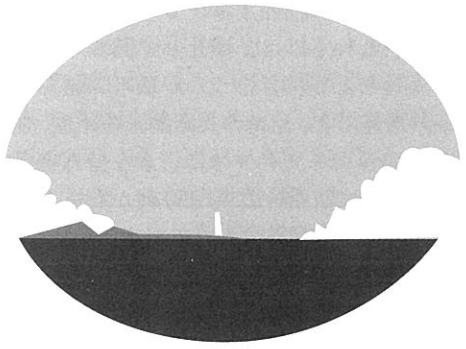
陸上競技部の一員であったということで多くの人が一体感を持ち、何時までも強く結ばれているのは実感として素晴らしいことだ。そう思いながら極く最近11期生がOB会の会長に就任したと聞いて、8期生もOB会の奥部屋に納まった感じがしていた。一桁期はすでに化石の存在かも知れないが、50周年の機に歴史の教科書として何処かの一頁に再登場できるのは素直にいって嬉しい。

そして40年を越した思い出は当然のことながら薄れていくが、その中には鮮明に残しておきたいものもある。四年間の純粋で、熱く燃えたあの青春は是非ともそうしたい思い出である。

そうはいいながら当時写真を撮る習慣もなかったし、残っているものが実に少ない。青春はそう長くは続かないと知っていたら、40年後の思い出のネタをもっともっと残していたのにと思う。だから50年史が完成して先輩、後輩各期の出来事を拝読すれば、それに消えかけていた記憶が重なって、一つの物語が出来上がるように思われる。

また自衛隊現職の時はいくつかあった「○○会」も、次第に役割を終えて一つひとつ遠のいていくが、「陸上競技部」は同期生会と同じように何時までも残ると思っている。同期生会が横に広がる単一層ならば競技部はむしろ縦に結ばれる多重層であろう。

なかでも“向こう三軒両隣”にあたる上三期と下三期は特別な七重層を作っている。この七重層が一期づつ、づれて重なっていけば無限回の摩天楼となる。我々は横の層と縦の層を持っていつまでも思い出に耽ることができる。そういう幸せがある。



寄稿

監督等の思い出

第二の挑戦（S56～58監督）

11期　川畑初夫

陸上自衛隊経歴管理には、個人の希望職務等を書く欄があります。

この欄は聞き置くだけの欄と思っていましたが、CGS卒業時（S56．8）、駄目もとで希望職務を防衛大学校中隊指導官と記述しました。

それというのも現在の私を形成してくれた原点は、防衛大陸上競技部であり、その恩返しをしたいと言う思いがあったことと、奇しくも２年後は箱根駅伝60回記念大会と言うことで出場校が増えることになっていたからです。

振り返れば、この時より16年前の昭和41年11月23日、11期生から14期生の長距離陣が青春をかけた第43回箱根駅伝予選会の幕が切って落とされました。全員がこれまでの自己の記録を更新しベストタイムでゴールしました。

しかしながら結果は、一人平均数秒差で神大に負け次点の第６位でした。負けた悔しさはありましたが、何も言うことのない完全燃焼の涙、涙で箱根への挑戦は終わりました。

さて、56．8、蓋を開けてみれば、防大指導教官の補職。青春の夢がかなわなかった男に再びの夢に挑戦せよとの神様の思し召しかと思いました。

着任してまもなく、私達を育てて下さった私の最も敬愛する井坂先生から監督を引き受けよとの指令、即座に了承しました。

２年後の箱根駅伝60回記念大会予選会は、当時の２年生の28期生が４年生になった時です。28期生は粒ぞろいで予選会突破の可能性を予感させるものがありました。

やがて分かった当時の学生気質は、次のようなものでした。納得し、また、自分たちの価値観に合致したことには脇目もふらずに没頭する。しかしながら押しつけや価値観の合わないものは、頑として聞き入れない。

この若人達とどう付き合うかが私の課題でした。

練習ぶりを見ると、当時の長距離、短距離、競歩及びフィールド陣の各キャプテンは、信念を持ち練習をリードしていましたので、静かに見守り何か有ったときにアドバイス出来れば、と言うのが私の考え抜いた結論でした。

そうこうするうちに、早、１年経過、記念大会の前年の予選会も迫ってまいりました。

幸いなことに親友である同期の山根君が57．8、防大学校本部に着任してくれました。

予選会への準備でOBとして何が出来るかを考えました。当時の学生の朝食は全員パン食でした。午前中の後半に20kmを走る予選会なのに、パン食で良いのかとの疑問が湧いてきました。学生に打診したところ、ご飯に越したことは無いとの意見でしたので予選会１週間前から朝食にご飯を準備しました。予選会通過は当時の状況からかなわぬ事でしたが、ご飯の効果の程は神のみぞ知る、でしょう。

次の日から学生は、来年の予選会突破を目指し日々練習に明け暮れていました。そして、２年目の夏、夏合宿をどうするかの検討を学生が実施していました。洩れ聞くところによると合宿期間を１週間以内に抑えようとの雰囲気。チャンスの年であり、１・２年生の記録が飛躍的に伸びるのが夏合宿、１・２年生の力が伸びてこそ予選通過が可能になるとの思いが私にあり、強制したいがそうも行かず、どうしたものかと思い煩っているうちに合宿の日数を10日近くにすると言う報告。さすが28期生と脱帽したものです。

ところが喜んだのも束の間、神様のいたずらか、チャンスの年の８月、自分への転勤命令。しかしながら全てのお膳立ては出来たと自負し、後事を山根君に託して幹部学校へ発ちました。

幹部学校から駆けつけた箱根駅伝60回記念大会予選会当日。参加選手の意気込みがひしひしと伝わってきました。まさに16年前の自分たちと同じでした。沿道からの声援は１秒でも稼いでくれの願いでした。選手達は、限界に挑戦し見事に走ってくれました。10人目の選手がゴールし早速タイムを概算するも何とも言えない状況。結果は、何故か、またも僅差で次点！

私自身が再びの夢を持ち、そして学生に夢を持たせながら、それを果たせてやれなかった申し訳なさで悔いばかり残る長い長い一日でした。

学生時代、次点で青春の夢が消え、指導官として母校に帰り、夢をもう一度と賭けた第二の挑戦も次点で終わりました。

夢はかないませんでしたが、夢を持たせてくれた学生の実力と、２年間、直に素晴らしい若人・後輩と接することが出来、まさに我が第二の挑戦に悔いなしでした。

私の防大陸上部及びOB会との係わり

11期　山根嘉大

1　学生時代

私は、陸上競技部入部以来故障がちで、「いつ退部しようか」と、いつも考えながら1・2年生を過ごした。そんな折、2学年の後半の頃先輩から主務付として部の手伝いを命ぜられたのを機会に、当時研究科学生であった5期生の星野毅先輩にお会いし、研究室に訪ねることも多くなり、陸上部の歴史や主務（部の裏方）の大切さ等数々の貴重な事を学ばせて頂いた。当時の陸上部の部員数は40名そこそこで、唯一の目標は箱根駅伝出場と言っても過言ではなかった。とは言え陸上競技には走跳投歩があり、防大も本来の姿に脱皮すべく4期～8期まで続いた長距離出身の主将から9・10期と他のパートから主将が生まれていた。10期生主務の後藤荘輔先輩が箱根予選の練習に専念されることもあり、3学年途中で実質的主務を行うこととなった私は、11期生が4学年になった陸上部の姿を『部員50名以上、その内長距離は少なくとも20名以上を確保し、箱根駅伝に必ず出場するとともに、走跳投歩備わった強力な魅力ある部にする。』と描いた。そのために、同期とともに部員の獲得と退部者の抑制に努力、奔走した。又、実力向上のため、長距離パートの箱根駅伝コース試走の数回実施と部員全員の学連記録会への積極的参加は極めて重要で、主務として学生課校友会係への計画承認申請と部員の交通費・食事代等の経費の確保は重大な任務だった。当時、井坂先生、星野先輩を中心とする諸先輩の熱意は凄まじく、部員に対する物心両面の支援のため、OB会の組織化、会則の草案作り等を急がれていた。私も、微力ながらお手伝いをし、部の大きな行事が終わる毎に、部の活動報告や支援要請の文書を作成しては、星野先輩の研究室や井坂先生の室をお借りしガリ板印刷をさせて頂き、部員の手紙を添えて先輩に郵送した。星野先輩が起草されたOB会会則（案）について意見を求められた際には、会費の納入について「年会費制の生涯納入」を生意気にも主張した記憶がある。

2　防大勤務時代

卒業後、井坂先生から度々電話を頂き、「防大に指導官で帰って来い」とお誘いを受けたが、自分では何とも出来ない事だった。防大卒業後は地方での勤務が続き、たまの入校時、現役の応援や隊付等で訪れる後輩を自宅に招く程度の私に、突然、防大勤務の内示が下りたのは昭和57年2月であった。同年3月、学生課課外活動係長（校友会係）として着任した。防大には既に同期の川畑が着任しており、井坂先生とコンビで長距離強化3年計画を立て「28期生が4学年時に箱根駅伝出場」を目標に27期生を特訓中であった。「川畑と山根が帰って来たからには鬼に金棒だ」と大歓迎を受けた。私は、校友会全般の指導と防大25周年記念事業の総合体育館建設の事業担当の特命を受けていたこともあり、陸上部に対しては顧問として井坂先生と川畑の専らお手伝いをした。その頃、防大に新浴場が完成し、旧浴場を校友会部室に改修することとなり、校友会本部と調整して陸上部の部室を確保した。

さて、3年計画の最終年度に川畑が転勤することとなり、当時補導係長となっていた私は監督を引き継ぎ、小隊指導官に着任していた23期・堀口英利君や研究科の23期・土田英一君等多くのOBの協力を得て箱根を目指した。28期生を中心とする現役部員の懸命の努力で記録は飛躍的に向上したが、他大学、特に新興私立大学の強化策には及ばず、またしても苦杯を喫した。しかし、当時付き合った27期生から31期生の後輩の真摯な姿は、今になってもさわやかに瞼に浮かぶ。

3　陸幕・市谷勤務時代

昭和60年3月、3年間の小原台での勤務を終え陸幕勤務となったが、早速OB会の理事を命ぜられ、専らOB会会長（当時、中央管制気象隊長）1期・新島章一先輩の指導受け係を自認し、陸幕で同室に勤務していた14期・山縣正明君、17期・市川菊代君とともにOB会総会の開催、審議事項の検討のお手伝いをした。3年後に市谷勤務となったが、市谷支部からの理事となり、引き続きOB会のお手伝いを続けた。当時のOB会の懸案は、会費未納者の増加による会費徴収不足であった。対策として、防大卒業時に一括終身会費を納入させる案がでたが、私は防大学生課勤務時代の補導係長として、4学年が卒業時に防大同窓会費の一括納入、各部OB会費の一括納入の他、諸経費負担で苦慮していることを問題視していただけに、終身一括納入制に反対し、年間会費制を主張し、会長に何度も意見を述べた。

4　その後の係わり

その後地方で勤務し、朝霞での勤務を最後に平成12年定年を迎え、千葉県の田舎に引っ込み自適の百姓生活に入った。平成13年秋頃（？）OB会理事長の21期・千葉徳次郎（陸幕人事計画課長）君から「OB会組織の改正について検討を行う」との連絡があり上京した。会合には、千葉理事長と30期・米津浩幸理事の他、数名の自衛隊を退職したOBが集まった。改正の趣旨は、「約500名となった会員、更に現役を退職した会員の増加によるOB会運営の複雑化に対処し、会の更なる発展と会の融和団結を図るため、役員組織を改正し、自衛官を退職したOBを主体とした組織に現役OBを融合する型の役員組織とし、役員の任期を定め、将来2～3年毎、定期的に若年期に更新し、OB会の活性化を維持する」というものであり、平成

14年度総会で審議することとなった。新組織は、冨沢会長の下、副会長に11期・赤羽益三、理事長に11期・小野寺平正以下役員には11・12・13期生を主体に組織し、現役から副理事長の21期・千葉徳次郎君以下陸・海・空幕勤務者で組織し、会運営が軌道に乗れば平成15年度に11期・赤羽君が会長に就任することとし、冨沢会長の了解を得た後平成14年度総会で満場一致の承認を得た。

平成15年度総会で赤羽会長が選出され、陸上部部長の戸部先生の提案もあり、防大陸上部50年史編集について審議し、16年度総会までに検討し、結果を報告することが承認された。その後、小野寺理事長が中心となり、陸上部監督29期・門石吉浩君の協力を得て資料収集を開始するとともに、各期キャプテン等先輩方のご指導を得て、役員会として50年史を作製することを総会に提案することになった。OB会のもう一つの懸案は、ここ数年の総会参加者、特に古参期会員の参加者激減であった。会員が500名を数え、関東地区の会員数は増加傾向にあるにも拘らず、総会参加者は50名程度であり、この状態はOB会長以下役員の若年期化が進めば、更に顕著になることが予想された。

この対策として、50年史を作製するとともに、平成14年度に会則を改正したばかりではあったが、私は「会に名誉会長、名誉副会長を設ける」改正案を提案し、会長以下役員会の了承を得た。この経過を踏まえ、平成16年度総会に審議事項として　①17年度前半を目途に防大陸上部50年史を編集する。その際、多くの会員の購入を促すため、OB会費を一部投入し１冊2,000円程度の価格とする。②会則の一部を改正し、会に名誉会長と副会長を設ける（名誉会長は最も古い主将経験者とし、名誉副会長は現会長より先輩期の主将経験者とする）等の提案を行い、総会参加会員の満場一致の承認を得た。

これにより、総会に出来るだけ多数の会員が一同に参加し、盛況の下、OB会員の縦と横の団結及び親睦が図られ、もって現役学生に対する物心両面の支援態勢が少しでも強化されればと願っている。陸上部50年史は、赤羽会長の指導の下で、13期・後藤理事長を始め陸幕・防大勤務の現役OBの担当者の手で既に着々と進行中であるが、会員の一人として担当者の努力に感謝しつつ、少しでもお手伝いが出来ればと拙い文を羅列した次第です。

陸上競技部の思い出（S45～47研究科学生）

11期　吉田道也

昭和45年４月、研究科学生として３年ぶりに小原台の土を踏みました。

しばらくして井坂先生にご挨拶に伺ったところ、思いがけないことを言われました。「このままでは陸上競技部が崩壊してしまうから、お前何とかしろ。」というのです。部員の数が少なく、練習への参加率も悪く、さっぱりまとまりがない、ということだったと思います。また、せっかくできたOB会も担当者が居らず、有名無実になっているということでした。当時、小原台には陸上競技部のOBが一人も居らず、かろうじて８期の赤羽１空尉（当時、現OB会長赤羽君の義理の兄）が、陸上競技部担当として世話をしてくれているだけでした。私は確かに学生時代は陸上競技部に在籍してはおりましたが、陸上競技はずぶの素人、先輩に言われるままにただ後ろのほうを付いて走っていただけで、学生を指導する知識も技量も持ち合わせておりませんでしたので、どうしたらよいのか途方にくれてしまいました。とにかくどうにかしなければと思いグランドに出ることにしました。技術的指導などとてもできませんから、何も言わなくてもみんなが練習に出てきてくれることを信じ、学生より早くグランドに出て石ころを拾い、水撒きをして、そして学生と一緒に走ることにしました。心配したほどでもなく、新入生も何人か入部し、相馬キャプテンと久楽サブがリーダーシップを発揮して部のほうはまとめてくれ、神奈川７大学対抗競技会の当番校としての任務も、佐藤マネージャーの努力で無事完遂することができました。

OB会のほうは、会員の掌握と会費の把握が問題でした。当時は幕の人事部で所属を調べるなどという才覚はありませんでしたので、井坂先生に届いていた手紙や「朝雲」の人事異動の記事等を頼りに、各部隊等に連絡をして所在を調べました。そして、まだワープロなどない時代ですから、研究室にあった和文タイプを使って名簿の作成をしました。しかし、完全に掌握することができず、何人かは所属不明のままでしたので、その後そのうちの何人かが退職扱いになっていたと聞き、申し訳なく思っております。会費のほうは過去の経緯を調べることもできず、改めてゼロからの出発にしてしまいました（もちろん残っていた金をチャラにしたわけではありませんが）。

後で考えてみると、神奈川７大学の当番校にもなっており、井坂先生は何も考えていなかった私に陸上競技部に目を向けさせるため、かなり脅しをかけてきたのかもしれませんが。とにかく井坂先生に乗せられて２年間、陸上競技部の活動に専念いたしました。その後はOBの方々も逐次指導教官等で小原台に来るようになり、部員数も一時は100名前後まで増え、後輩の学生諸官が関東ICなどでも活躍しているニュースに触れては、あの頃の苦労を懐かしく思い出しております。

研究科の勉強はそっちのけで部活に熱中していた学生は私ばかりではなく、防大研究科○○部専攻という学生が多く、その行動が学校当局の目に余ったのか、数年後

に研究科学生の部活禁止令が出されたとか・・・・・。

余談ですが、そのとき井坂先生に勧められて見合いをした相手が現在の妻です。井坂先生には頭が上がりません。今は、懐かしい横浜三ツ沢競技場の裏に居を構え、三ツ沢公園をホームグラウンドにしてジョギングなどをしながら余生を楽しんでおります。

小原台生活を離れて30有余年、もう時効だろうと思って筆を執りました。陸上競技部の益々のご発展を祈念いたしております。

防大陸上競技部コーチの思い出（S58～60コーチ）

23期　堀口英利

私がまだ２等陸尉の頃、防大訓練指導官に補職され、同時に陸上競技部コーチになったのは、もう22年前のこと。そのころを思い出しながら我らの防大陸上競技部の伝統について考えてみたいと思います。

昭和57年夏、第７施設大隊の小隊長として勤務し、そろそろ攻撃支援ばかりの訓練に自信を持ち始め、POEの入校待ち、しかも見合いの結婚話も概定した頃、中隊長から「来年も同じ訓練をするか、それとも防大に行ってみるか」といわれたのが、そもそもコーチへの最初のきっかけでした。

陸上競技部のコーチともなれば、若い部員と同世代に近い自分としては、ともに走り、悩みというイメージがあり、当然ながら異動と同時に春合宿に参加することになるのかな？と思いつつ、新婚旅行のハワイは断念したもののせめて洒落たところに行きたいと考えていたところ、当時の監督から２泊３日で計画して努めて早く春合宿に合流せよとの指示。がっかり・・・・

気を取り直して、選ばれて防大指導官兼ねて陸上競技部コーチに就任するのだからと気合いを入れ、頭髪もすっきり短めのスポーツ刈りにして勇躍赴任。春合宿に行ってびっくり、学生の頭はけっこう長め、拍子抜けしたものの気を取り直して学生たちと一緒にランニング。これがコーチとしてのスタートでした。

そんな自由闊達な雰囲気の学生たちでしたが、練習はいたって真剣、自分たちで練習メニューを工夫し、弛まぬ不断の練習を積み重ねており、さすが我が後輩と感心しきり。２年間のコーチをしている間に関東理工系大学陸上競技会では優勝し、悲願でもある箱根駅伝予選会では本当にもうちょっとで本戦かと思う成果を挙げました。

陸上競技部に所属する学生たちの多くは、防衛大に来て初めて陸上という競技に出会ったはずなのに、４年間の校友会活動を楽しみながら、やるときはやるという気風で努力を積み重ね、結果を出すという伝統を見つけたんだなと思ったものでした。そんなすばらしい学生たちをコーチとして支えることができたことは私の一生の思い出であり、宝物です。

陸上競技部顧問としての思い出（H３～９顧問）

曹長　岡部　宏

防衛大学校創立50周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

近年、国連平和維持活動に対する派遣など、世界平和への貢献や大規模な災害における迅速な救援活動により、自衛隊に対する国民の期待が高まっており、その役割は一層重要なものになってきております。学生諸君はしっかりと勉学とスポーツを両立してもらいたいと思います。

私は、防衛大へ平成３年８月異動し、平成９年３月までの５年半、陸上部顧問として在籍し、特に中長距離を担当して理工系大会及び箱根駅伝大会予選会を目標におき、当時のことを「頑張っていたなあ」と思い浮かべ懐かしく思い出しています。

当時、学生は高校生時代に少しやっていた者、走ることが好きだから始める者と、これといって速い者はいなかったように記憶しています。しかし、練習への取り組む姿勢は誰よりも負けなかったと確信しています。学生諸君は、学業と訓練、行事とスポーツを両立していかなければならなかったため、かなり負担を抱え努力していたのは頭が下がる思いでした。特に、印象に残っているのは、長野県黒姫山高原においての合宿で、日頃余り走り込んでいないため、筋肉痛や足にまめをつくって、なかなか帰って来なくて車で迎えに行ったが最後まで車に乗らず完走していました。10人が時間制限内で走り切ったことは、将来において、大いに役に立っていると思っています。

私は、原隊において、防大生の活躍を拝見し、心強く思っていますので頑張って下さい。また、陸上部の活躍を心から祈っています。

陸上競技部顧問としての思い出（H７～18顧問）

曹長　平　　一　義

平成７年３月、防衛大学校へ転属が決まり、それから約９年半充実した勤務をさせて頂きました。充実した勤務ができたのは、学生と共に汗を流し、グランドで時計を片手に激を飛ばし、春及び夏合宿を学生と共に過ごした陸上競技部の顧問としての日々があったからだと確信している。顧問として在籍させて頂いた間、百数十人の学生が防大という厳しい環境の中、苦悩しながら汗を流し、流した分だけの苦しみを喜びにかえ卒業していった。今沢山の学生の顔が思い浮かんでくる。私自身、学生達の「速くなりたい」とか「チームを強くしたい」という気持ちを共有でき、自分にできるアドバイスをしてこれたと思う。今思えば「口うるさい陸曹」だったかもしれない。

在籍間、学生と話し合い部隊との合同練習や「蔵王坊平」での夏合宿、また春は千葉合宿を開始するなどトップアスリートと同じフィールドで練習に励み、学生自ら意識改革をした時期でもあった。学生は辛かったかもしれないが私は充実し、楽しかったという思い出しか思い浮かばない。

平成15年１月３日、第79回箱根駅伝復路がスタートした。小雪の舞い降りる箱根路、通称「山下りの６区」を防衛大学校のユニフォームを着た岡本学生が駆け下りた。初の学連選抜チームが結成されたこの年、防大は「創立50周年」の年でもあり、箱根路で防衛大学校のユニフォームを着て走れたことは大変名誉なことであると共に、１人とはいえ箱根を走ったことは防大の学生にとっても良い刺激になったと思う。

スタートを確認し中継所の小田原に向かう車中、テレビで岡本学生と防大の紹介をした時、これまでの事を思い出し、感激し涙が出た。そして雪が道路を白く染める悪天候の中、岡本学生は予定していたタイムに近い記録で襷をつないでくれた。

防衛大学校はまさに文武両道の「修練の場」であり、学生はその中でアスリートとして１センチでも遠くへ、0.1秒でも速く走るために努力している。学生の努力し成長していく姿、そしてやり遂げ喜ぶ姿が指導者にとって「夢と希望」であり、その１つが叶ったときでもあった。日々の練習、合宿、関東理工系競技会はじめ各種競技会、そして箱根駅伝というように毎年大きな目標を持ち日々努力している学生達と共に同じくフィールドで夢を追いかけることができ、学生から学んだことも多く、私自身も成長できた。伝統ある防衛大学校陸上競技部の顧問として在籍できたことは大変な名誉であると共に一生忘れない私の宝である。

厳しい環境の中でこそ努力し成果を出すことが防大生に求められる姿であり、それを達成できる力を陸上競技部の学生達は持っている。在校生諸君は先輩達が築いてきた伝統を受け継ぎ、これからも自分の力を信じ、見えない限界に向かって努力し、大きな夢を叶えて頂きたい。最後に在籍間、戸部部長はじめ小滝教授、監督並びに各顧問の方々のご指導・ご協力のもと楽しく勤務させて頂きました。ありがとうございました。これからも影ながら応援させて頂きます。

